

平成31年度 武雄市立武雄小学校 学校評価結果

1 学校教育目標	2 本年度の重点目標
自ら考え、正しく判断できる、人間性豊かな児童の育成	官民一体型学校「武雄花まる学園」「コミュニティ・スクール」(学校運営協議会制度)を活用した地域の学校づくり ~定着へ~

達成度 A:ほぼ達成できた
B:概ね達成できた
C:やや不十分である
D:不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3 目標・評価							
①知的な学校・・・知的好奇心の育成							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力の向上	1 基礎基本の定着 《意識調査》 《業者テスト及びCART、 学習状況調査》 2 児童それぞれが 学んだ知識・技能等 を社会や実生活 の様々な場面に活用 《アクティブ・ラーニング》	1 「授業が分かる」児童の割合を80%を目指す。業者テスト、CART、学習状況調査で、全国・県平均を上回る。 2 主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)の視点からの学習課程や授業の改善を図る。	1 TT, 少人数指導やICT活用を推進し、基礎基本の確実な定着を図る。小テスト、ドリル学習、放課後学習を定期的実施し、学習内容の確実な定着を図る。 2 学習課程を視覚化したり、パターン化したりすることで、学び合いの質を高める。また、児童の変容を振り返らせる。 3 授業チェックシートや児童アンケートをもとに評価する。	B	高学年では単元の特性に合わせて、TTや少人数授業に取り組んできた。その結果、12月の学習状況調査では県平均を上回る項目も出てきた。 各学年の背面黒板に学習の足跡を残すコーナーを設置し、学びの視覚化に取り組むことで、学習内容の定着が図れた。 1時間の授業の中に対話活動の場を仕組んだり、振り返りの時間を設けたりするなど各担任で取り組むことができたが、学校全体として統一したものは作れなかった。	各学年の学習の足跡になる学習用語や公式などの掲示物を共有化し、次年度に残していけるとよい。授業の中での対話活動や振り返りタイムなどをいれた学習過程の統一化を図っていくとよいと思う。
	●志を高める教育	自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちを高める教育活動の推進	1 自らの夢や目指す姿、目標の実現に向けて努力する気持ちがある(努力している)と答える児童を80%以上にする。	1 全ての教科等、学校行事等を通して、道徳の時間に夢や目標について自ら考えさせる時間や場面を設ける。(内容項目を確認して確実な授業の実施を行う。)	A	アンケートの結果、夢や目標に向かって頑張っている児童が93%だったため。	自己評価が低い児童の理由には、「夢や目標がない。」というこたえが多かった。小さくてもいいので、目標をもって生活し、達成することの喜びを感じ取らせたい。
学校運営	○教職員の資質向上	学び合う教師集団	1 校内研究を中心に、理論研究や授業研究に努める。(グループごとの提案授業研究)	1 図画工作科の目標や内容構成、指導上の特性を学ぶ。 2 地域性を生かした題材開発に取り組む。 3 対話的活動を効果的に取り入れる学習過程を探る。	B	各学年地域素材の焼き物に取り組めた。またどの学年も対話を意識した学習過程を組むことができた。	次年度は研究2年目にあたるので組織を再編成し、授業研究部と環境整備部に分け研究に取り組んでいく。図工の時間だけでなく、様々な場や時を意識して児童の造形的資質を高めたい。
教育活動	○ICT活用教育の推進	ICT機器の効果的な活用	1 電子黒板を活用した授業の効果的な活用を図る。 2 タブレット端末を活用した効果的な授業づくりをめざす。 3 情報活用能力や「プログラミング的思考」を育てる授業実践に向けての研修や全学級での授業作りに取り組む。	1 ICT機器の効果的な活用とその習慣化を図る。 2 発達段階に応じて、タブレットやパソコンを使い、全学年で授業実践し、それを蓄積していく。 3 武雄市教育研究会プログラミング部会での取り組みを本校の実践に生かす。	B	・各学級でICT機器の利活用と習慣化を図ることができた。 ・タブレットに不具合が生じ、十分に活用できない学年もあった。 ・Pepperやタブレットwp活用し、本校の実践に生かすことができた。	・スマイル学習の活用が学年間で偏りが見られるので、工夫を施す必要があると考える。 ・プログラミング学習を活用した異学年交流があると、より多くの学年にとって身近に感じてもらえると思う。
②居心地のいい学校・・・自己肯定感の育成							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	互いに認め合う集団づくり	1 わんぱく活動や、クラブ・委員会活動、児童集会において友だちのよさやがんばりに気付いた児童の割合を80%以上にする。	1 出番、役割、承認のサイクルを意識した活動や場を仕組む。 2 異学年交流の場を年間計画の中に位置づけ、上学年には下学年との関わりをもつことを意識させる。	A	わんぱく活動や青空教室、特技披露集会などで楽しむことができた児童の割合が80%以上だった。年間計画に基づいて活動することができた。	昨年度に引き続き、特技披露集会や青空教室などの活動で、更に、児童の自主性が高まった。活動内容によっては、準備や運営において時間配分や児童の主体的な関わりを促すための改善の必要性が見られた。
教育活動	●いじめの問題への対応	いじめを見逃さない環境の構築	1 学校で安心して楽しく過ごしているという児童の意識を90%にする。	1 毎週1回「気になる子」報告会を行う。 いじめアンケートを実施して状況把握をし、いじめにつながる可能性がある事実でも対応にあたる。 2 いじめ対策委員会において、具体的対応策を協議し、全職員で共通理解して指導・支援にあたる。	A	学校に楽しく通っているかという設問への肯定的な回答が、児童アンケートでは86%であるが、保護者アンケートでは96%にのぼっており、おおむね目標達成といえる。「気になる子」報告会を定期的に行うことで職員間で共通理解ができて、いじめにまでつながらず見守りや支援ができた。いじめ発生時には、いじめ対策委員会において、具体的対応策を協議し、全職員で共通理解して指導・支援にあたることにより早期解決につながった。	児童の心の内や人間関係等はめまぐるしく変化している。いじめアンケートを年間回数回だけでなく、月に一回程度は心のアンケートを取り、一人一人の児童の変化を見逃さないために、児童の実態把握に努めたほうがよい。
教育活動	○特別支援教育の充実	教員の専門性と意識の向上	1 特別支援教育への理解と共生教育を推進する。 2 子ども一人一人との関係を大切に相談活動を充実させる。	1 交流学級と相互連携し、個の能力を伸長する支援体制を確立する。 2 計画的、定期的に会議(支援会議、気になる子の報告会、スマイル会議等)を実施し、児童の実態把握、関係機関等との連携等を協議し、支援体制を構築していく。	B	定期的な会議では、関係機関との連携も取れ、校内で支援体制を整え、個別に対応することができ成果がみられた。UDや特別支援の意識を高めるために資料を配布し、研修を行うことができた。支援を要する児童の数に対して人的支援が足りないことが課題。	職員間の共通理解を十分に行い、支援体制を整え協力して支援にあたる。引き続き、職員の意識向上のため資料配布や研修の場を設ける。
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	校務・教育活動の効率化	1 タイムレコーダーを活用して教職員の勤務時間の把握を行い、前年度の同月比-10%にする。	1 月の前半の残業時間を伝え、後半の見直しを持たせる。 2 ICTを活用して効率的に業務を行う。 3 事務職員の支援体制。校納金、服務関係帳簿の点検等を行う。	A	「1」の取り組みにより、残業の見直しを意識する職員が増えた。(アンケートより、25%増) 事務室の支援により、会計業務が軽減できた。 残業時間前月比-10%目標であったが、-4%にとどまった。	残業時間の大幅な減にはならなかったが、確実に改善の方向にある。来年度は、より、授業や学級経営に専念できるように業務の精選を行う。「外部人材の活用・連携」を目標の中に明示する。
③元気な学校・・・挑戦心の育成							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体力づくり	1 基本的な生活習慣の確立 2 体力の向上	1 「早寝・早起き・朝ごはん」等の基本的な生活習慣の割合を80%以上にする。 2 「体を動かすことが好き」の児童を80%以上にする。	1 生活習慣チェックシート等を活用し、睡眠や朝食喫食、テレビ視聴やゲームの時間設定の啓発を行う。 2 学校便りや学年通信等で基本的な生活習慣の習慣化について定期的に啓発する。 3 日々の体育の学習を中心にして、大縄トライアルやスポーツフェスタなども行い、体を動かすことの心地よさに触れさせる機会をもつ。	A	朝ごはんを毎日食べてきている児童は81%であった。 低学年でも夜12時以降に寝ている児童が若干名いる。 体を動かすことが好きな児童が89%であった。	テレビやゲームの時間と絡めて睡眠の大切さについて全体へ指導するとともに、遅刻傾向や保健室頻回入室児童等、気になる児童に対して継続的な個別指導を行っている。 運動を好む児童が多いが、反面、ほとんど運動をしない児童に対しての手立てを次年度は考える必要がある。
学校運営	○地域の学校づくり	1 「コミュニティ・スクール(学校運営協議会制度)」の推進 2 民間学習塾「はなまる学習会」と組み、地域人材を活用した学習活動の導入	1 地域の学校として、学校運営協議会の提言を受けての学校運営を行う。 2 「花まるタイム」導入による地域の学習支援員参加による教育活動の定着を図る。	1 年3回の学校運営協議会を開催し、校長の考える学校経営を説明して、地域の提言をもとに1つ以上具現化する。 2 町公民館と連携して地域人材確保と活動の定着を図る。	A	・学校運営協議会委員の方の意見や助言を生かしながら、学校運営に取り組むことができた。 ・町の公民館、区長会等、地域と連携しながら官民一体型学校の取り組みを進め、地域人材の協力を得て学習活動の充実を図ることができた。	・「花まるタイム」の時間を生かしてより学力向上につなげていくこと。 ・育友会との連携を図りながら、官民一体型学校への保護者の理解と参画を推し進めていくこと。
4 本年度のまとめ・次年度の取組							
<p>・特別支援教育では、支援の「見える化」や各関係機関との連携が効果的に図れ、効果を上げることができた。</p> <p>・「働き方改革」については、業務削減や会議時間の短縮ができ、退勤時間も早くなってきた。職員一人一人の意識改革もでき、一気に解決はできないが、業務の効果的な推進に努力することができた。</p> <p>・学力向上については、ICTの効果的な利活用や学習指導の工夫をさらに研修し、結果を追求する必要がある。教職員の資質向上のための手立ても課題である。</p> <p>・いじめ防止対策委員会「スマイル会議」を通して、子どもたちの安心安全を確保する取り組みを進めることができた。次年度は、さらに計画的に効果的に進めたい。</p>							